第42号

茨城の幼児教育

幼児期で培われた育ちや学びの，
小学校生活や学習への円滑な接続

平成29年3月

茨城県教育委員会

茨城の幼児教育 第42号

茨城県教育委員会

表紙の絵「そらのたび」

鹿嶋市立平井認定こども園　たかやま　こうた さん（５歳）

ま　え　が　き

平成27年４月に，国において，質の高い幼児教育を実現するため「子ども・子育て支援新制度」が施行され，幼児教育の大きな改善・充実が求められております。教育基本法に謳われているとおり，幼児期は，生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期であり，義務教育及びその後の教育の基礎となるものです。そうしたことを科学的に示すデータも数多く示されるなど，幼児教育の重要性の認識は，ますます高まっています。

この幼児期の教育は，幼稚園，保育所，認定こども園等の幼児教育施設で担われていることを踏まえ，これら全ての施設における教育の質を確保しつつ，その育ちと学びを円滑に小学校教育に接続させることが求められています。

本県におきましても，こうしたことを踏まえ，平成28年度より５年間を計画期間として策定した「いばらき教育プラン」の中で，幼児教育と家庭教育の推進を掲げ，幼児教育と小学校教育の円滑な接続推進及び幼児教育の質の向上を図ってまてります。

このような折，幼児教育指導資料「茨城の幼児教育第42号」を発行することとなりました。この指導資料は，幼児教育の当面の課題を捉え，指導方法等の改善のための研究を行い，幼児教育の充実を図ることを目的に，昭和43年以来作成してまいりました。本号は，幼稚園，保育所，認定こども園，小学校の先生方に，作成に携わっていただいており，公私立や設置形態等を超えて，多くの方に読んでいただけるよう編集しました。

今年度は，研究テーマを「幼児期で培われた育ちや学びの，小学校生活や学習への円滑な接続」とし，幼児教育での「学びの芽生え」を小学校での「自覚的な学び」へと繋げるための様々な工夫がなされた実践事例や研究推進園での取組を掲載しております。各園等での研修会等の機会にご活用していただくことで，子供たちの成長を願うとともに，日々ご尽力いただいている先生方のお役に立つことを願っております。

最後に，本指導資料の作成にあたり，御指導・御助言いただきました就学前教育推進小委員会の委員の皆様をはじめ，編集作業にご協力をいただきました作成委員の先生方に，心から感謝を申し上げます。

平成 29 年 3 月

茨城県教育庁学校教育部義務教育課長
森　作　宜　民

目　　次

1　実践事例　～幼児期で培われた育ちや学びの，小学校生活や学習への円滑な接続～

⑴　幼稚園における実践

①　就学に向けて期待が膨らむ幼小連携をめざして …… 1

②　保幼小連絡協議会の開催　－教職員の研修を通して－ …… 3

③　幼児と児童との交流を通して　－隣接する幼稚園と小学校の取組－ …… 6

⑵　保育所における実践

①　一人一人の子供についての理解を深めるために …… 7

②　アプローチカリキュラムの取組 …… 10

③　協同的な遊び・体験の充実 …… 12

⑶　認定こども園における実践

①　幼児と児童の交流を通して　－立地上，小学校との距離がある場合の取組－ …… 15

②　「またやりたい」「もっと遊びたい」の心情を育む環境づくり
～幼児が遊びに没頭できる教師の援助～ …… 18

③　幼児と児童の交流の工夫　～小学校でのサマープログラムを楽しもう！～ …… 21

⑷　小学校における実践

①　幼児との交流活動の実践事例～生活科「なつとなかよし」～ …… 23

②　特別活動「学校生活を安全に，安心しておくろう～三笠スタイル～」 …… 25

2　平成28年度茨城県幼児教育推進校の取組

⑴　常総市立豊田幼稚園の実践 …… 27

⑵　鹿嶋市立平井認定こども園の実践 …… 43

3　資　　料

・平成28年度幼保小接続のための研修会資料 …… 45

1　実　践　事　例

～幼児期で培われた育ちや学びの，小学校生活や学習への円滑な接続～

⑴　幼稚園における実践

①　就学に向けて期待が膨らむ幼小連携をめざして

②　保幼小連絡協議会の開催

－教職員の研修を通して－

③　幼児と児童との交流を通して

－隣接する幼稚園と小学校の取組－

絵：「さつまいもたくさんとれたよ」常総市立豊田幼稚園　いなば　あこ　さん（５歳）

就学に向けて期待が膨らむ幼小連携をめざして	幼　稚　園
1　現　　状	本園は小学校と同敷地内に位置付き，園庭と校庭は全天候型のグリーンコートでつながっている。小学校の休み時間には，互いに声をかけ合うなど小学校を身近に感じながら生活することができる恵まれた環境にある。これまでも幼児・児童間の交流を行ってきてはいるが，交流や教師間の連携についての課題が見えてきているところである。具体的な内容や取り組みの見通しをもちながら，交流を継続していくことで５歳児にとっては小学校への入学に期待を膨らませていけるようにしたいと考えた。
2　ね　ら　い	○　園児が小学生と一緒に遊びの中でかかわることを通して，親しみをもつようになる。 ○　小学校の様子を知り，就学に向けて期待を膨らませるようにする。

3　実 践 事 例

⑴　事例１「小学校のお兄さんお姉さんと遊ぼう」（５歳児・６月）

小学校一年生との交流を年間を通して行うために小学校担任と打ち合わせ会を開き，交流の一回目は，小学生が幼稚園の遊びの場にかかわり，一緒に遊ぶことになった。

小学生が幼稚園を訪れ，「一緒に遊びましょう。」と園児を誘いに来た。「Ａちゃんだ！」と昨年まで幼稚園で一緒に生活していた仲良しのお姉さんを見付けると，Ｂ児は手を振りながら駆け寄った。

小学生との交流

今年度初めての交流で園児は少し驚いている様子だったが，しばらくして自分の遊びの場へ行くと，小学生と一緒に遊び始めた。「何をして遊んでいるの？」と小学生のＣ児に尋ねられると，「魔女になってるの。薬を作っているんだ。」とハーブの瓶を開けて見せた。ずっと魔女の帽子を作りたいと思っていたＤ児は「魔女の帽子が欲しいんだ。」とつぶやくと，Ｃ児から「どんなのが作りたいの？」と聞かれ，あれこれ説明しながら一緒に作り始めた。Ｃ児が親身になって考えてくれたことで，素敵な帽子が出来上がった。「小学生のお姉さんに手伝ってもらったの。」「お姉さんってすごいんだよ。」と，自分ではどうすればよいか分からなかったことが小学生の手助けで解決できたことに喜び，憧れの気持ちもわいた様子だった。

どんな帽子を作りたいの？

交流の最後には，「今度は小学校に遊びに来てください。」と誘いがあり，Ｅ児は「小学校に行けるんだって！」と嬉しそうに次回の交流に思いを寄せていた。

⑵　事例２「お相手さんから手紙がきた！」（５歳・２月）

小学校入学前に一人一人の園児宛てに一年生から“一日入学”のお誘いの手紙が届いた。一日入学では，園児一人に対し“お相手さん”を決めて小学校に招待され，一日を過ごす。「手紙きた？」

「お相手さんは〇〇さんだって。」「何をするのかな。」「楽しみだね。」と子供たちの間で小学校のことが話題となり盛り上がっていた。それからは一日入学の日を楽しみにしている様子が見られた。

一日入学の当日には，お相手さんのクラスで一緒に遊んだり，小学校の中を探検したり，校庭や小鳥の森を案内してもらったりして過ごす。一日入学の翌日，子供たちは興奮気味に教師に報告し，「教室がいっぱいあったよ。」「お兄さんたちが椅子に座らせてくれた。」「小鳥の森で遊んだよ。」と体験してきたことを話し合っている。遊びの中では，ランドセルを作ったり，小学校をイメージして机や椅子を並べて授業風景を再現してみたり，「そうだ，保健室もあったよね。」とベッドや体重計を作ったりするなど，小学校への思いをいろいろな方法で表現するようになった。

教師は子供たちの気持ちを受け止め，小学校と交流の打ち合わせを行うことで，園児が授業の様子を見学する機会が設けられた。普段は賑やかな子供たちだが，真剣な表情で授業を聞く姿が見られた。また，一年生の空き教室を借りて椅子に座ってみたり，教科書に触れたり，給食室や理科室などの教室を見学したりするなど様々な体験をすることで，小学校がさらに身近に感じられるようになった。

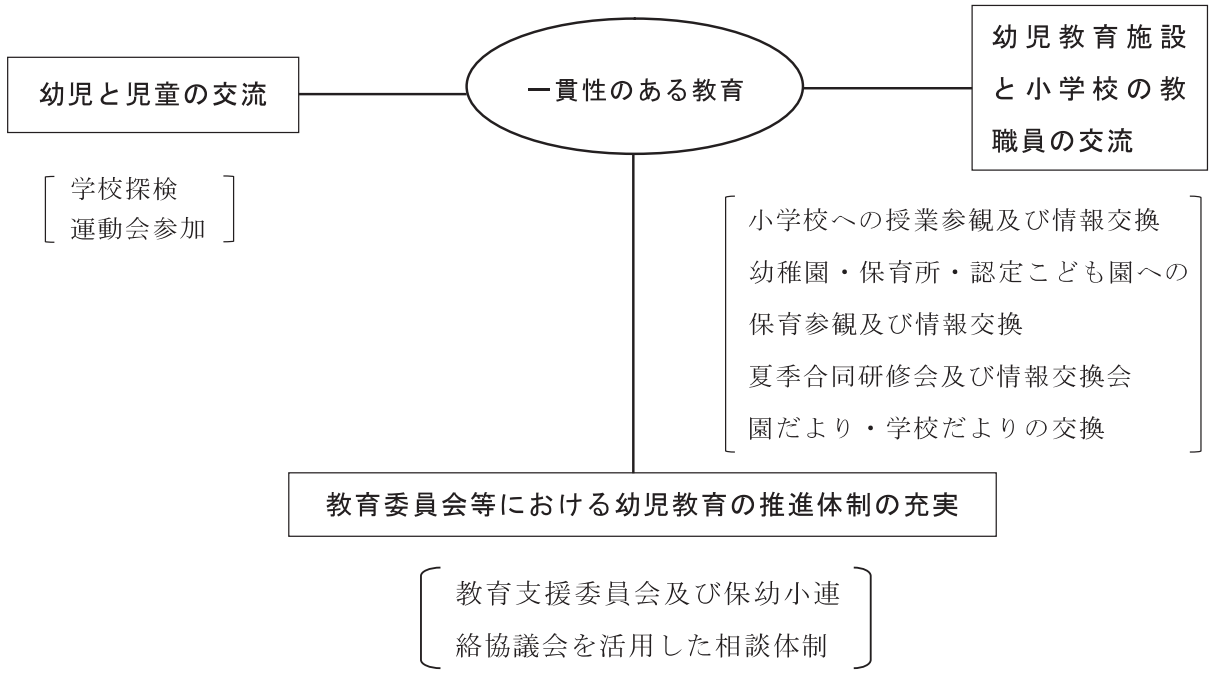
4　成果と課題

- 園児は，昨年まで一緒に過ごしていた友達を懐かしく思い，遊びを通して教えてもらったり助けてもらったりしたことで，一年生に対する親しみをもつことができた。
- 事前の交流の計画・打ち合わせ時に幼稚園での遊びについて小学校の教師に伝えることで，園児が自分たちの力で遊びを進めていることを知り，描いていた幼稚園生との違いに気付くことができたようだ。５歳児の姿を知ることで，その過程の先に一年生の姿があるということを考える機会になったと思われる。
- 一年生との交流で子供たちは小学校を身近に感じることができた。さらに豊かな交流にするために，計画を立てるだけではなく，交流を通して教師が感じ取った双方の子どもの思いや育ちを伝え合い，共有し，理解し合うことが本当の意味での連携と考える。さらに形だけの交流ではなく，交流がその必然性から生れていくことが大切であると考える。
- 幼稚園と小学校の教師が互いを知るための幼小連携をしていくためには，気軽に話し合える雰囲気作りやそのための時間の確保をしていくことが大切で，互いの教育を理解するために研修を重ねていきたい。

保幼小連絡協議会の開催　－教職員の研修を通して－	幼　稚　園
1　現　　状	保幼小連絡協議会の連携と体制が整ってきている。しかし，幼児教育や学校教育，それぞれの指導の仕方や援助，支援の在り方，環境に違いが見られ，教師や幼児だけでなく保護者も戸惑いや不安をもつ姿が見られる。
2　ね　ら　い	○　遊びを通した学びから教科を通した学びへつなげるための幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の充実を図る。 ○　保幼小連絡協議会による連携を図り，幼児教育を基盤として各小学校との就学相談を進めていく。

3　実 践 事 例

(1)　保幼小連絡協議会の開催



(2)　市の保幼小連絡協議会について

	日　時	参　加　者	内　　容
第1回	6月	幼稚園職員 保育所職員 認定こども園職員 小学校職員	○　卒園児がいる各小学校への授業参観 ○　小学校と幼児教育施設の情報交換

第 2 回	8月	幼稚園職員 保育所職員 認定こども園職員 小学校職員	○　特別支援教育コーディネーター講話（特別支援学校） 演題「発達障害の疑いのある幼児児童への対応について」 ○　グループ協議 「保幼小接続の視点から，幼児と低学年の児童が一緒に活動できる単元や題材，カリキュラムについて」 ○　小学校と幼児教育施設の情報交換
第 3 回	10月	幼稚園長 保育所長 認定こども園長 小学校長	平成28年度幼児期教育接続推進のための研修会 ○　幼児教育指導員講話（大学教授） 演題「幼児期教育と小学校教育の接続推進のための研修会について」 ＜講演の様子＞ ○　幼稚園参観 ・廊下から「降園のひととき」の様子 ・園内の環境構成 ＜参観の様子＞ ○　グループ協議 「幼児教育と小学校教育の円滑な接続のために求められている管理職の役割について」
第 4 回	1月	幼稚園の幼児 保育所の幼児 認定こども園の幼児 小学校の児童	○　入学する小学校へ訪問 ・学校探検 ・授業の参加 ・遊び時間の交流

第 5 回	２月	幼稚園職員 保育所職員 認定こども園職員 小学校職員	○　幼稚園・保育所・認定こども園への保育参観 ○　小学校と幼児教育施設の情報交換 すくすくカード を利用

４　成果と課題

・幼児教育と小学校教育との円滑な接続を図るために，保幼小連絡協議会を通して教職員の交流を大切にし，お互いの教育を幼児の視点から理解し合うことができた。

・小学校教育は，ゼロからのスタートではなく，幼児教育からの発達や学びを通して連続性の教育だからこそ，教職員の研修や情報交換の必要性が高くなってきている。年に３回の情報交換（入学までの指導の共有→入学時の姿→入学してからの姿）を実施することで，幼児がスムーズに新しい環境で出発できる。しかし，教職員の異動に伴い発達の状態が伝わりにくいことが課題となり，すくすくカードを利用し，幼児の発達の様子や支援方法を小学校に伝えることで，これからの指導に生かせると考える。

幼児と児童との交流を通して －隣接する幼稚園と小学校の取組－	幼　稚　園
1　現　　状	本園は幼稚園と小学校が隣接し，交流しやすい環境である。卒園した子供たちが，休み時間に幼稚園の園庭に遊びに来たり，保育室を覗き込み，懐かしんだりする様子も見られる。年間を通して，児童との交流も少しずつ増えてきている。
2　ね　ら　い	○　アサガオの生長に関心をもち，自分たちで育てる喜びを味わわせる。 ○　小学生への感謝の気持ちを，様々な方法で伝えられるようにする。

3　実 践 事 例

⑴　事例１「アサガオの苗を育ててみよう！」（４・５歳児，１年生・６月）

６月中旬，１年生の児童たちが，アサガオの苗を，園児にプレゼントしてくれた。「何色のお花が咲くかな？」「アサガオが入ってる箱にも飾りがついてるよ！」とうれしそうな表情の園児。「お兄さん，お姉さんが，みんなのために一生懸命作ってくれたんだね。嬉しいね！もらったアサガオの苗どうする？」と教師が投げかけると「みんなで育てたい！」との声が聞かれた。各自が一つずつ持ち帰り，また，幼稚園でもアサガオの苗を育てることにした。毎日，園児がアサガオの水やり当番を交替しながら行うようにした。

⑵　事例２「アサガオがきれいに咲いたよ」（４・５歳児，１年生・７月）

７月になると，アサガオが咲き始めた。登園してくると，園児は「あっ！アサガオが咲いてるよ。」「きれいだね。」とうれしそうに話す姿が見られた。教師が「お兄さん，お姉さんにもらったアサガオが，咲いて嬉しいね。嬉しい気持ちを，お兄さんとお姉さん達にも伝えたいね」と投げかけると「お手紙書いたらいいんじゃない？」「折り紙でアサガオ作ったらどう？」と，いろいろな意見がでてきた。園児からのアイディアを取り入れ，７月中旬，アサガオの苗のお礼に１年生の教室へと園児と向かった。児童も，園児からのプレゼントにうれしそうな表情を見せてくれた。園に戻ると，「お兄さんとお姉さん喜んでくれたね」と，園児同士で話す様子も見られ，満足感が味わえたようだった。

アサガオが咲いたよ

小学生へのプレゼント

4　成果と課題

・５歳児は，一緒に生活した１年生の児童から，アサガオの苗をプレゼントされたことで，嬉しそうな表情が見られた。昨年度もアサガオの苗をプレゼントされた経験から，水やりの仕方や当番で交替するなど，自分たちで考えてアサガオの世話ができたことは園児にとってよい経験となった。また，アサガオの生長にも関心をもち，図鑑で調べる姿も見られるようになった。感謝の気持ちを手紙で伝えようとする姿に園児の心の成長を感じることができた。

・年間を通して，園児と児童の交流を行うことができるようになってきたが，今後は教師間の交流をもてるように心がけていく必要があると感じた。

1　実　践　事　例

～幼児期で培われた育ちや学びの，小学校生活や学習への円滑な接続～

⑵　保育所における実践

①　一人一人の子供についての理解を深めるために

②　アプローチカリキュラムの取組

③　協同的な遊び・体験の充実

絵：「たのしかったどうぶつえん」鹿嶋市立平井認定こども園　いいむら　かりん さん（５歳）

一人一人の子供についての理解を深めるために	保　育　所
1　現　　状	○　発達障害等，特別な支援を必要とする子供について，適切な支援が求められている。 ○　保護者が子供の状況に気付かずにいたり，育児の不安や悩みを保育者に伝えられずにいたりするなど，保護者と保育者の共通理解が十分でないことがある。 ○　生活の中で積み上げてきた子供に対する適切な支援方法などの情報が，小学校に十分に伝えられず，子供が能力を十分に伸ばすことが難しい状況になっている場合がある。
2　ね　ら　い	○　教育支援機関等との連携により，保育の中で適切な支援が行えるようにする。 ○　子育て支援が専門の大学教授による全保護者対象の講演会を実施し，子どもについての理解を深める。 ○　園児の継続的な健全育成を目指し，支援を必要とする子供を含めた一人一人の園児について，成育歴や効果的な支援方法などを小学校にしっかりと繋げていく。

3　園と各機関等との連携についての年間計画

月	市及び小学校との連携	教育支援機関との連携	保護者との連携
4		・職員向け勉強会及びケース会議	・保護者向け講演 ・個別相談会
5	・市教育委員会主催研修会（特別支援教育）	・教育支援機関主催の勉強会及び個別相談	
6	・保幼小連絡協議会（小学校主催） ・５歳児授業参観（小学校特別支援学級担当教員） ・特別支援学校主催の研修会 ・市社会福祉協議会主催の研修会 ・保育士部会研修会（気になる子の保育）	・巡回相談及びケース会議	・保育参観 ・個別相談
7	・市の専門機関巡回相談 ・特別支援学校主催の研修会 ・特別支援学校の見学・授業参観 ・５歳児授業参観（教育センター就学相談員）	・教育支援機関主催の勉強会及び個別相談 ・特別支援教育研修会（偏食への対応）	

8	・保健所主催研修会（発達障害）	・特別支援教育研修会（絵カードの使用方法）	
9		・教育支援機関主催の勉強会及び個別相談 ・巡回相談及びケース会議	
10	・特別支援教育研修会（教育委員会主催） ・５歳児授業参観（教育センター就学相談員）	・小児神経専門医の勉強会 ・巡回相談及びケース会議	・運動会
11	・市の専門機関巡回相談 ・５歳児授業参観（小学校特別支援学級担当教員）	・教育支援機関主催の勉強会及び個別相談	
12		・教育支援機関主催の勉強会（講師：小児神経専門医）及び個別相談	
1	・５歳児授業参観（小学校特別支援学級担当教員） ・保育者部会研修会（保護者支援）	・教育支援機関主催の勉強会及び個別相談 ・巡回相談及びケース会議	・発表会
2	・保幼小連絡協議会（小学校主催）		
3	・５歳児授業参観（小学校特別支援学級担当教員）	・教育支援機関主催の勉強会及び個別相談 ・巡回相談及びケース会議	
【年間を通しての活動】 ・保護者面談（必要に応じて）　・保育参観（希望する保護者）			

4　実践事例

⑴　市及び小学校との連携

・小学校主催の保小連絡協議会に毎回参加する。保育園を卒園した児童の授業参観，小学校教員と共に児童や園児に関する情報交換を行う。

・年数回，小学校の特別支援学級担当教員に，保育園の保育参観を依頼する。支援を必要とする子供を含めた保育の様子や保育者の関わり方などを参観し，情報交換を行う。

・市の教育委員会，小学校，特別支援学校，保健センターなど，子供を取り巻く各機関との連携を密にし，研修会に参加したり，子供やその成育環境などに関する情報共有に努めたりしていく。

⑵　教育支援機関との連携

・年度当初に，発達障害に関する専門家の研修を全職員で受ける。

・教育支援機関と契約し，定期的な巡回相談に基づき，その都度全クラスでケース会議を行うことで，一人一人の園児について適切な支援方法の助言を受ける。

・支援を必要とする子供についての情報や支援方法について助言を受けることで，早期発見，早期対応に繋げることができる。

・職員は，外部の勉強会（大学教授や小児神経科の専門医等による，年12回程度），市主催の研修会やその他特別支援教育に関する様々な研修会に参加し，研修する機会をもつ。

・定期的な園内研修を行い，職員の共通理解を図る。

⑶　保護者との連携

・４月に全保護者対象に大学教授による「子育てに関する研修会」及び「個別相談会（子育てに悩む保護者対象）」を実施する。

・支援を必要とする子供については，クラス担任や主任が保護者と面談を行い，保護者の状況に十分配慮しながら，今後の支援方法について話合いを行う。

・保護者が孤立しないよう継続的に支援を続け，子供の最善の成長を共に考え支えていく。

5　成果と課題

・教育支援機関と連携をとり，定期的な巡回相談を受け，継続的かつ適切な助言を受けることで，全職員が共通の理解を深めると共に，子供に合わせた保育内容や援助方法を身に付けることができ，保育方法の向上に繋がった。

・専門家による保護者に対する講演会や個別相談を通して，保護者の悩みや不安などの解消ができた。また，子育ての悩みを保育者に気軽に相談できるようになり保護者支援，配慮を必要とする子供の早期対応にも繋がった。

・支援を必要とする子供にとって，適切な支援が継続的に行われるように，引き続き努力する必要がある。各専門機関との連携を大切にしながら，常に子供にとって最善の環境づくり，保育に努め，その都度必要な機関と情報共有していくことで，小学校へのスムーズな接続にも繋がってきていると思われる。

・今後は中学校区内の小学校だけでなく，すべての小学校としっかりと連携していけるよう働きかけていきたい。

・保育者の早番遅番などローテーション勤務により，クラス担任以外の保育者が対象児と関わることも多いので，これまで以上に園全体でのケース会議が必要と思われる。

アプローチカリキュラムの取組	保　育　所
1　現　　状	市教育委員会で作成した「笑顔をつなぐ保幼小連携ハンドブック」に掲載されているアプローチカリキュラムに基づいて，就学前に身に付けたいことを確認し，小学校教育への滑らかな接続を目指している。
2　ね　ら　い	○　自己肯定感を基盤とし，様々な活動を行うなかで，自信を培い自己発揮しながら，生活する力・人と関わる力・学ぶ力を育てる。

3　実 践 事 例

⑴　事例１「研修会の実施」

・５月に，年長児担任が就学前の保育について学ぶため，市教育委員会指導課に講師の派遣を依頼し研修会を実施した。保幼小連携ハンドブックの中のアプローチカリキュラム作成の経緯・意義を聞いて各園の保育の参考とする。

⑵　事例２「保護者に向けて，アプローチカリキュラムの内容発信」

・４月の保育参観にて，就学までに育てたい力について共通理解を図る。更に家庭で取り組んでほしいことをお願いする。

・６月の個別面談にて，子供の園や家庭での様子を伝え合い共通理解する。また，子育ての悩みや困っていることを話し合う。

・10月のクラスだよりにて，半年間の成長と今後伸ばしていきたいことを確認する。

⑶　事例３「子供たちと一緒に取り組むアプローチカリキュラム」

・４歳児は，がんばりカードを作成し，自分でできることを増やしていく。

・５歳児は，生活や遊びの中で，３つの力（生活する力，人と関わる力，学ぶ力）を育てる。

・笑顔をつなぐ保幼小連携ハンドブックより（一部抜粋）

【生活する力】

①　ハンカチ・ティッシュを持つ。

②　自分の持ち物の管理をし，ロッカー内の整理整頓をする。

③　給食の配膳をし，自分の量を取り時間内で食べる。

④　立って，靴を履いたり脱いだりすることができる。

⑤　交通安全教室や散歩などを通して，安全な道路の歩き方を知る。

【人と関わる力】

①　自分から進んで挨拶する。

②　保育士や友達との関わりを楽しむ。

③　友達と協力したり話し合ったりしながら遊ぶ。

④　自分のよさや友達のよさに気づき，優しい気持ちが育つ。

⑤　相手の顔を見て，最後まで話を聞く。

⑥　自分の思いや考えを人前で話すことができる。

【学ぶ力】

①　やってみたいという意欲をもつ。

② 片付けの時間等意識して活動する。

③ 遊びを通して，数や文字に興味をもつ。

④ 動植物の生長の変化に気付く。

⑤ 一つの遊びにじっくり取り組む。

⑥ 友達と同じ目標に向かって活動する。

表　アプローチカリキュラム　　５歳児

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
３つの力	５歳児として自信をもって活動する段階					協同する経験を重ねる段階				小学校に期待感を高める段階		
	・ハンカチ，ティッシュを持つ。 ・交通安全教室や散歩などを通して安全な道路の歩き方を知る。 ・自分の持ち物を管理し，ロッカー内の整理整頓をする。 ・給食の配膳をし，自分の量を取り時間内で食べる。 ・立って，靴を履いたり脱いだりすることができる。 ・自分から進んで挨拶する。　・自分のよさや友達の良さに気づき，優しい気持ちを育つ。 ・保育者や友達との関わりを楽しむ。　・友達と協力したり話し合ったりしながら遊ぶ。 ・相手の顔を見て，最後まで話を聞く。　・自分の思いや考えを人前で話すことができる。 ・片付けの時間等意識して活動する。 ・やってみたいという意欲を持つ。　・一つの遊びにじっくり取り組む。 ・動植物の生長の変化に気づく。　・遊びを通して，数や文字に興味を持つ。 ・友達と同じ目標に向かって活動する。											
保幼小連携			幼稚園との交流					幼稚園との交流			幼稚園との交流 小学校体験学習 給食体験	
家庭への働きかけ	個別面談				クラスだより配布			クラスだより配布				

４　成果と課題

・３つの力を育てるよう意識してきたことで，子供たちの自信や意欲につながり，自己発揮して充実した園生活を送っている。

・保護者に就学前に身に付けておきたいことを発信することで，保護者の不安も解消され，一緒に成長を喜び合えるようになる。また，信頼関係も深まる。

・アプローチカリキュラムを作ることで，保育者も小学校への接続を意識して，見通しをもって保育を進められる。しかし，保育所保育指針・幼稚園教育要領等に掲げられているように一人一人の育ちを大切にし，子供たちの状態に合ったカリキュラムを作成していく必要がある。そのため，５歳児から意識するのではなく，小さいころから園全体で取り組めるような体制を整えることが課題となる。

・「保幼小連携ハンドブック」の活用ポイントの中の「みんなちがってみんないい」「今よりもちょっと先へ」「小学校へのドキドキを少なめに，ワクワクを多めにするために」の言葉を念頭に置きながら，子供たち一人一人の健やかな成長を願って保育を進めていきたい。

協同的な遊び・体験の充実	保　育　所
1　現　　状	５歳児が中心となる行事が増え，友達と共に育ちあう姿が見られる。夏まつりは，保護者や卒園児などが集まる大きな行事である。５歳児は，遊戯・太鼓など発表の場もあり，楽しい行事となっている。
2　ね　ら　い	○　友達と同じテーマや目標に向かってお互いの思いを出し合い，夏まつりの製作活動に取り組むようにする。 ○　異年齢児と関わりをもちながら，夏まつりを楽しむようにする。

3　実 践 事 例

活 動 内 容	園　児　の　様　子
1　夏まつりのテーマを話し合って決める。 2　「おかしのくに」のテーマに合わせて製作をする。	・５歳児が，今まで経験した夏まつりを思い出しながら，自分たちのテーマについて話し合った。自分の意見をきちんと伝えたり，友達の意見にも耳を傾けたりして，一つに決めようとする姿が見られた。テーマは，「おかしのくに」となった。 ・５歳児は，お菓子の家とお菓子の木，まつりの看板などを製作した。また，お菓子の木は，園全体でも製作に取り組み，他クラスと一緒に製作していくことで，夏まつりを楽しみにする気持ちが更に膨らんだ。製作中も，「～をつくろう」「～をしよう」と，自分の考えを出し合う姿が見られた。友達に「こうやればいいんだよ」と教える姿も見られ，みんなで一つの物をつくる楽しさを十分味わえた。 お菓子の木 お菓子の家の製作 親子手作り提灯と遊戯のお菓子装飾 お菓子の家の前で太鼓の発表

3　異年齢児と一緒に遊戯の発表をする。	・今年の夏まつりのオープニングは，異年齢児で交流し，３・４・５歳児一緒の遊戯で始まった。３・４歳児は，５歳児の真似をして元気に踊り，５歳児は，優しく教えながらリードする姿が見られた。保育園ならではの関わりに，保護者から「かわいい。ほほえましい」などの声が聞かれた。 ３・４・５歳児一緒に ５歳児がリード
4　卒園生と一緒に関わって遊ぶ。	・卒園生に招待状を送り，一緒に夏まつりを楽しむ。来園した卒園生を見つけると名前を呼びあって，再会を喜んでいる様子が見られた。模擬店で一緒に遊ぶ中で会話を楽しみ，関わりを深めていた。また，卒園生同士・保護者同士で話 している姿もみられ，情報交換の場にもなっている。

4　成　　果

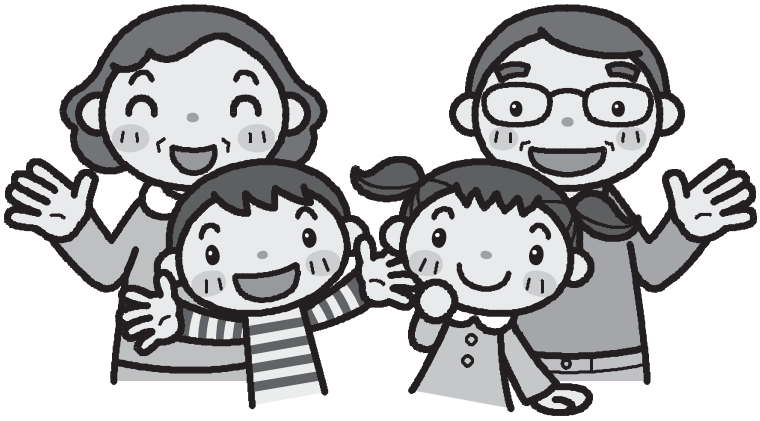
・保育者が子供たち一人一人の思いに耳を傾け援助することで，園児は，友達と一緒に考えを出し合い同じ目標に向かって活動することができた。

・初めて経験することに対して，「できない」と尻込みする子も，保育者や友達の励ましを力に変え，自信につなげていた。

5　課　　題

・普段の何気ない異年齢児とのふれあいの中から生まれる小さい子をいたわる気持ちが，夏まつりで一緒に遊戯の発表をしたことで，更に深まった。縦のつながりが薄れている昨今，保育園の良さを生かした異年齢児との活動をさらに意識して取り入れていくことが今後の課題となる。

・保育園は，保護者の就労により，いろいろな地域から集まり小学校への入学も１校ではなく多校にわたっている。夏まつりに招待することで卒園後もつながりを持ち，楽しいひと時を過ごすことができた。今後も関わりを深めるため，卒園生と関われる機会を多くするよう心掛けたい。



1　実　践　事　例

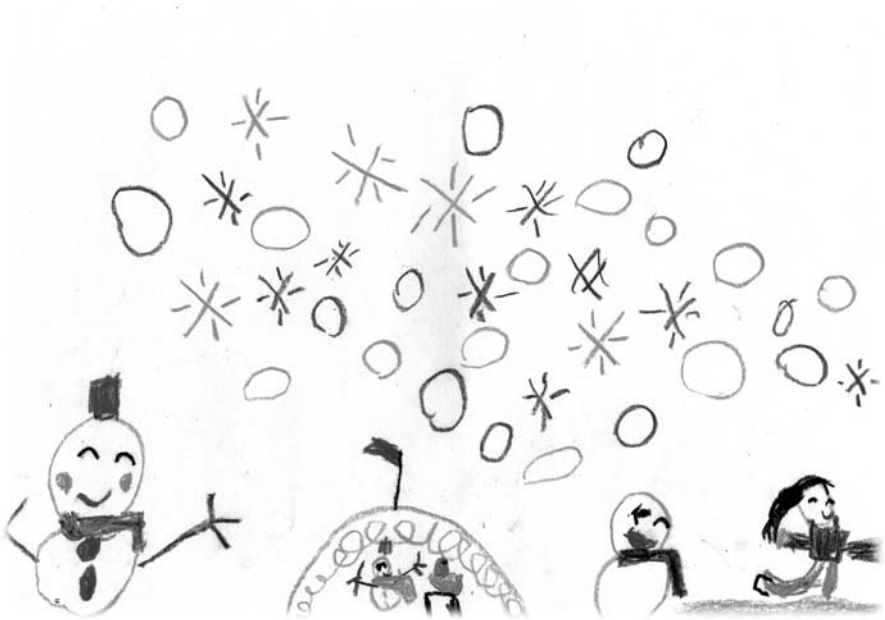
～幼児期で培われた育ちや学びの，小学校生活や学習への円滑な接続～

⑶　認定こども園における実践

①　幼児と児童の交流を通して
　　－立地上，小学校との距離がある場合の取組－

②　「またやりたい」「もっと遊びたい」の心情を育む環境づくり
　　～幼児が遊びに没頭できる教師の援助～

③　幼児と児童の交流の工夫
　　～小学校でのサマープログラムを楽しもう！～



絵：「ゆきのくに」鹿嶋市立平井認定こども園　うちの　こはる さん（５歳）

幼児と児童の交流を通して －立地上，小学校との距離がある場合の取組－	認定こども園
1　幼児の実態	○　立地上，小学校との距離があり，日常的な交流を図ることが難しい。 ○　小学校の運動会に参加する等の関わりを通して，就学への期待や憧れが芽生え始めている。 ○　友達との遊びやお泊り保育を通して，自分たちで生活を進めることへの自信がついてきた。園内ではアサガオや様々な野菜の栽培も自分たちで水やりや収穫をしながら関わりを深めている。
2　ね　ら　い	○　園児と児童が一緒に活動したり教師の話を聞いたりする中で，学校生活に対する親しみと期待感を持つようになる。 ○　栽培活動を通して身近な自然に関心をもち，親しみをもって関わる。

3　実 践 事 例

⑴　事例１「６年生と一緒にマリーゴールドを育てよう」（５歳児・７月）

通学区の小学校と連携を図り，マリーゴールド（人権の花）を譲り受けて栽培委員会の代表児童と一緒に植えることにした。

＜場　所＞　保育園

＜参加者＞　６年生（栽培委員会）・ 園児（５歳児）

※　児童はタクシーで来園

＜準備物＞　（小学校）苗・プランター・パネル・肥料・培養土・学校名カード

（保育園）シート・シャベル

園 児 ・ 児 童 の 活 動	教 師 の 配 慮
1　園児はグループに分かれて整列して待つ。 ・児童が到着し，園児は準備物を運びこむ児童の様子を見つめる。	・雨のため，作業場所を園庭から室内に変更した。
2　園児と児童が対面し，挨拶をする。	
3　児童が自己紹介をする。	・児童の名前を声に出して確認したり，サブネームを決めたりして園児の緊張をほぐす。
4　児童が植え替えの準備をする。	・準備の時間を十分取る。
5　園児と小学校教師が学校生活や準備について話し合う。	・保育者は園児に寄り添い，園児が話に参加できるようにする。
6　児童がパネルをもとに人権の花の意味，苗の世話の仕方について説明をする。	・難しい言葉や聞きなれない言葉を補足しながら話に集中できるようにする。 ・グループごとの動きに留意し，植えつけ方を確認しながら作業がスムーズにいくようにする。

7　児童のリーダーシップでグループごとに植え替えをする。 ・苗の取り出し方，穴の大きさ，深さを確かめる。 ・プランターを前にグループごとの記念写真を撮る。 8　児童と園児で活動のまとめをする。 ・「花に水をやるときは？」「土が乾いたら？」「水をあげすぎると？」など問いかけに答える。 ・お礼の挨拶をし，大切に育てていくことを約束する。 ・園で収穫したジャガイモを児童に贈る。 ・児童が園を出発する。 9　クラスに戻り，振り返りをする。	・会話の中から園児の気づきを言葉にし，広げるようにする。（花や土の手触り・手の汚れなど） ・天気など水やりのタイミングを確かめる。 ・気がついたことや育て方について確認をする。 ・保護者にも目を向けてもらえる場所にプランターを設置する。 ・枯れないように協力しあって水やりをするように，意識付けるようにする。

説明を聞く

小学校教師との話し合い

丁寧に取り出す

仕上がりを見る

記念写真

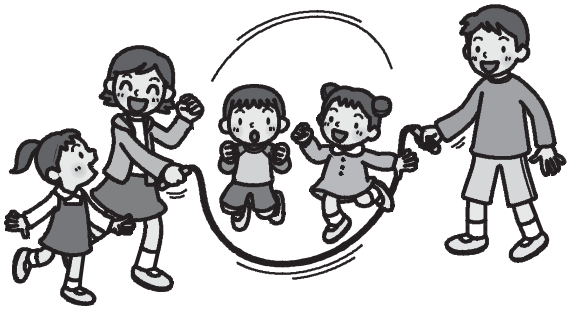
ボトルで水やり

⑵　事例２「種を贈ろう」（５歳児・11月）

花が枯れるまで水やりを続けている。教師が花の季節が終わる時期になったことを伝えると，朝顔の栽培の経験から種ができることに気付くようになる。こぼれた種を見つけて話し合い，種ができたことを小学校に知らせることに決まる。小学校に宛ててお礼の手紙と一緒に種を贈った。

４　成果と課題

・幼児は，花の世話を自分たちが行うことを小学生に伝えることにより，目的がはっきりし，協力し合いながら丁寧に取り組むことができた。
・引率の小学校教師との対話の中で，小学校生活のイメージが膨らんだ。一人一人が発表する際の表情や言葉から，指名されて対話に参加するワクワク感や自分の発言を認めてもらえたうれしさ，早く小学校に行きたいという気持ちがみてとれた。
・児童がてきぱきと活動している姿に接した園児は，「すごい」「楽しい」と言葉にし，小学生が温かく迎えようとしてくれていることに気付き，親近感や安心感が生れたと感じた。
・グループ編成は直前に行ったが，まとめの際に整然と並ぶことができ，園児が集中して取り組んでいたことが感じられた。
・プランターは玄関前のスロープに置くようにしたので，園児たちが継続して自主的に水やりが行えた。
・植物の栽培活動での交流により小学生と交流を行ったが，これをきっかけに，さらに交流を深めていきたい。



「またやりたい」「もっと遊びたい」の心情を育む環境づくり ～幼児が遊びに没頭できる教師の援助～	認定こども園

1　幼児の実態	○　１号認定幼稚園児と２号認定保育園児が互いの生活リズムが違うことを受け入れて年齢に応じた生活ができるようになってきている。 ○　異年齢児との関わりの中で，友達の手助けをしようとする姿が見られる。 ○　集中して話を聞いたり，遊んだりすることが難しい幼児がいる。
2　ね　ら　い	○　日々の生活の中で，美しさや不思議さを感じることで，自発的な遊びへつながるように環境構成をしていく。 ○　試行錯誤しながら遊びに取り組み，満足感を感じることで意欲を育てる。

3　実 践 事 例

⑴　事例１「コンサートごっこをしよう」（３歳児）

幼　児　の　動　き	教 師 の 動 き
1　夏休み明け，２号認定保育園児は1号認定幼稚園児に会えることを楽しみにしていた。 2　ピアノ演奏が始まると，友達とおしゃべりを止めてピアノを聴いた。 ・「なんて曲なの？」と，つぶやく。 ・音楽に合わせて手拍子をする。 ・体を揺らして音楽にのる。 ・自然に口ずさむ。 ① 全園児で一緒に歌ったという共通の体験が心を動かすきっかけ 3　鑑賞会後の様子 ・「先生ありがとう。」「一緒に歌ったよね。」 4　幼児の変容　消極的な子→積極的に ・自分から挨拶（道徳性の芽生え） ・教師に音楽鑑賞会を話題に話しかける。 5　音楽鑑賞会翌日の３歳児クラスの様子 ・一人の子がピアノに気がつき，弾く真似をしながら遊びだす。（豊かな感性と表現） ・興味をもった数人の幼児が数人集まってくる。 ↓ ・数人の幼児でピアノの「コンサートごっこ」	○　長期休業中であった幼稚園児と，毎日登園していた保育園児とも，元気に２学期を過ごせるようにと願いをこめて始業式後に音楽鑑賞会を開く。 自分達の知っている曲だ！ 鑑賞会後ピアノごっこを始めた ○　音楽鑑賞会の後，遊びへ発展すると考えて，楽器遊びができそうな廃材を用意する。ティッシュボックスで作ったピアノを興味がもてるようにさり気なく用意して遊びにつながるきっかけ作りをした。 ○　幼児の姿に合わせて，教師も一緒に身体

・「私もやりたい。」「僕もやる。ピアノを作って。」と訴えるようになる。

↓

・いつの間にかみんなが遊びの中に入ってくる。
・ピアノだけでなく「ギターがほしい。」と自分の思いを伝え，遊びが徐々に発展する。

↓

・コンサートを毎日開催し，お客になる幼児もいて，「コンサートごっこ」がクラス全体に広がった。

を揺らしながらピアノを弾く。（共感）

○　自分の思いを言葉にできない幼児もいるので，様々な廃材楽器を用意する。

○　遊びの様子を捉え，少しずつ廃材楽器を増やし，環境を変化させていった。

○　太鼓やマイク，ＣＤで音楽を流す等，周りで見ていた幼児も自ら参加できるように環境を通して援助をしていく。

○　教師が遊びの中に入らなくても遊びが続くようになる。

ギターで「コンサートごっこ」をする様子

⑵　事例２「プラネタリウムごっこをしよう」（５歳児）

幼　児　の　動　き	教　師　の　動　き
１　園外保育でプラネタリウムを鑑賞。 ・輝く星の美しさを表現したい。 ２　幼児２名の提案で「プラネタリウムごっこ」をすることになった。 ３　プラネタリウムのように星が光らない。 「どうすれば光るのかな？」（試行錯誤） ・うまくいかなくて諦めそうになる。（挫折感） ②　友だちや教師からの励ましの言葉が心を動かすきっかけ ・Ａ児「すごくきれい。私，諦めないで最後までやりたいよ。」と友達を誘う。 ・Ａ児は教師のアイディアを見て「これならできる。」（意欲の芽生え） ↓	「お部屋でもプラネタリウムを作ってみんなに見せてあげようよ」 「プラネタリウムごっこ」準備中 ○　「どうすればプラネタリウムができるのか」話し合いの場を数回設定する。 ○　教師もカラーセロファンや懐中電灯を出す等，アイディアを出す。 「こうすると光ってない？どう？きれいに見える？」実際にやって見せる。（技術を伝える） ○　５歳児には成功させるだけでなく，見守ったり意図的に挫折感や葛藤体験を経験させたりする。（思考力の芽生え） ○　遊びにつながる問いかけをして，幼児の思いを引き出しクラスみんなで共感し合えるように意見をつなぐ。（遊びの振り返り）

・プラネタリウム作りがクラス全体へ

↓

・「プラネタリウムでは，ナレーションもあったよね。」（言葉による伝えあい）

↓

・役割を分担して遊びを工夫し，友達とのやりとりを楽しむ。（自立心）

○　友達のアイディアを聞いたり相談したりしながら，友達の良さにも気がつけるようにする。（人との関わり）

「プラネタリウムごっこ」の様子

4　成　　果

・事例１，２の体験が幼児の心を動かすきっかけとなり，クラスの遊びへとつながった。（協同体験）

・３歳児は経験が少ないため，意図的に教師が環境を構成することで幼児の内面が刺激され，興味や関心が芽生えた。そして，思わず遊んでみたくなる環境から自ら遊びへと入り，発展していった。

・主体的に遊びに取り組み，満足感を得ていくことが，幼児にとって有意義な時間なのだと感じた。（豊かな感性と表現力）

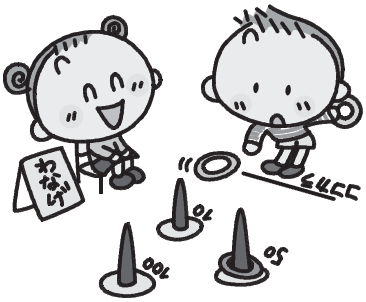
・「またやりたい」「もっと遊びたい」という日々の積み重ねにより，小学校での学びに向かう力が育つのではないかと感じた。

・５歳児には意図的に挫折感や葛藤体験を経験させるようにした。そのような経験の中で，話合いの場を設けることで，折り合いを付けたり，幼児同士が共感し合ったりするなど，互いに影響し，友達のよさに気が付くことができた。（道徳性）

5　課　　題

・教師が，幼児期に育ってほしいことを念頭に置き，この遊びがどのような学びにつながっていくのか，幼児の発達を捉えて見通しをもつことが課題である。

・今後については，円滑な接続を行う上で，どのような活動が幼児にとってよいのか，幼稚園だけでなく小学校と互いに意見を交換する機会をもつよいと考える。



幼児と児童の交流の工夫 ～小学校でのサマープログラムを楽しもう！～	認定こども園

1　幼児の実態	○　「ランドセルは何色にする？」「僕は○○小学校に行くんだ。」と就学を楽しみにする様子が見られるが，中には「小学校行きたくない・・・」「給食が嫌。」と不安に思う園児もいる。
2　ね　ら　い	○　５歳児と１年生の児童が触れ合う時間をもち，共に活動することで就学への不安を解消する。 ○　廃材を使って好きな動物をつくるという目的をもって，園児と児童が互いに意見を伝え合いながら，コミュニケーション力を高める。

3　実 践 事 例（５歳児，１年生・８月）

活 動 内 容	園　児　の　様　子
1　名札づくりをする。 （ガムテープに名前を書く。）	・緊張や高揚感が感じられ，児童の姿に圧倒されているようだった。 ・いつもと環境が変わったため，小学校教師の説明を聞けなかったり，ペンで名前を書くことにも不安そうにしたりする園児がいた。
2　自己紹介ゲームを行う。 （児童や園児とタッチをして，それぞれに英語で名前を言い合う。）	・緊張から声が小さくなってしまう園児が多かったが，児童にリードされながら順番に自己紹介をすることができた。 自己紹介ゲームの様子
3　果物を探そうゲームを行う。（英語で言われた果物の所に集まる。）	・園児は理解が早く，楽しんで参加する様子が見られた。体を動かして遊ぶことで緊張もほぐれたようである。
・昼食準備及び昼食	・トイレや水道の場所を園児が児童に聞く姿が見られた。 ・教室で食べたので，学習用具や机の使い方，かばんの置き場所に園児が興味を持ち児童に尋ねる姿が見られた。「小学生になったら使えるの？」と楽しみにする様子が見られ，期待が高まったようである。 ・小学校の給食の時間や昼食時のマナーを聞き，幼稚園と同じ部分や違う部分に気付くことができた。 ・いつも給食を完食できない園児は，児童も給食を残してしまうことがあると聞き，安心したようである。

4　廃材で動物づくりをする。 （グループ毎に好きな動物を廃材などを使って製作する。）	・午前中の活動や昼食で児童との関わりが増えたことにより，相談しながら材料を集めたり，作る部分の担当を決めたりと，話し合って進めることができた。 ・児童がリードするグループや，園児がどんどん進めてしまい，児童が園児に合わせるグループ等，様々な姿が見られた。 動物づくりの様子
5　製作物の工夫した部分や作品名等を用紙に記入する。	・児童がリードしながら進めるが，園児も自分で名前を書いたり，頑張ったことを伝えて児童に書いてもらったりする姿が見られた。
6　発表し，質問を受ける。	・グループ毎に作品を見せ合い，工夫した所等を発表したり，他のグループからの質問を受けたりした。午前中に緊張感が見られた園児も，発表時には伝えたいことや見せたい物がたくさんあり，活発に発表していた。 発表の様子
・降園	・園児が降園する時には互いに「また遊ぼうね。」「続きやっておいてね。」等と声をかけ合っていた。

4　成果と課題

・最初は園児が緊張した様子で，普段できていることも不安そうに行う様子が見られた。しかし，児童が声をかけたり一緒に過ごしたりすることで，緊張もほぐれていった。

・教師が声をかけなくても，自分から児童にトイレ等の場所を尋ねる姿が見られた。就学後も分からないことは聞くということができるとよい。

・児童と関わり交流することで，幼稚園と小学校で似ている部分があると知り，給食やトイレ等への不安も解消されたようである。

・２学期には小学校のグラウンドを使って運動会練習が行われたが，交流活動をした児童や小学校教師から休み時間に声をかけられ，小学校への親しみがさらに深まった。

・今回児童と過ごしたことで，保護者が心配する給食に関してや友達とうまく関われるか，周りから遅れずに活動できるか等も把握することができ，保護者へ伝えることができた。実際にそれぞれの小学校へ入学したら違う部分もあるかもしれないが，現時点では安心したようである。

・教師としては，１年生の１学期の姿を知り共に活動したことにより，安心した部分と就学後における一人一人の課題が見えてきた。今後も幼稚園と小学校の教師が共に子供達の姿を伝え合い，交流を通して互いの現状を把握しながら理解を深めていきたい。

1　実　践　事　例

～幼児期で培われた育ちや学びの，小学校生活や学習への円滑な接続～

⑷　小学校における実践

①　幼児との交流活動の実践事例
～生活科「なつとなかよし」～

②　特別活動「学校生活を安全に，安心して
おくろう～三笠スタイル～」

絵：「高齢者とのつどい」常総市立豊田幼稚園　ひとみ　かんな さん（５歳）

幼児との交流活動の実践事例 ～生活科「なつとなかよし」～	小　学　校

1　現　　状	年間を通して，隣接する幼稚園や学区内にある保育所との交流活動を行っている。生活科の学習の中では，季節ごとの単元に交流を取り入れている。 この時期の児童の実態としては，学校生活にも慣れ，楽しい遊びを自分たちで見つけようとしている。クラスの友達との関わり合いも増えて，小さなトラブルが目立つようになってきた。
2　ね　ら　い	○　シャボン玉遊び，水遊び，砂遊びなどを通して夏がきたことに気付き，友達や幼児と仲良く，夏を楽しく過ごすことができる。 ○　幼児との交流活動を通して，自分の成長に気付くことができる。

3　実 践 事 例（1年生・7月）

タイム スケジュール	交 流 活 動	支 援 及 び 留 意 点	
		小　学　校	幼稚園・保育所
10：30	1　整列，あいさつ ・はじめの会	小学生と幼児が向かい合うように並び，お互いの表情がよく見えるようにする。	
		・司会の担当を小学生が行い，自分たちがリードして活動を行っていくという気持ちが高まるようにする。	・小学生の様子を見ることで，小学生や小学校に対して憧れが持てるようにする。
10：35 ～ 10：45	2　全体を二つに分けて，じゃんけん列車をする。 ｛1の1（小） さくら組（幼） くま組（保） ｛1の2（小） うめ組（幼） ぞう組（保）	・小学校の校歌を歌いながら歩く。 ・伴奏は，教師が鍵盤ハーモニカで行い，児童や幼児の様子を確認ができるようにする。 ・小学生は幼児を探しながらじゃんけんをするように助言する。	・普段から，幼稚園や保育所で遊んでいる遊びを取り入れてもらうようにする。 ・じゃんけんでペアを探せない幼児に対して，声かけを行うようにする。
		じゃんけん列車の先頭になった児童や幼児に自己紹介をさせるようにする。小学生は，好きな物や得意なことが発表できるようにする。	

10：50 ～ 11：10	3　小グループごとの遊びを行う。 {水遊び シャボン玉遊び 砂遊び	・児童は，遊びの約束についてグループごとに話し合い，幼児に伝えられるようにする。 ・教師は，幼児に対して，思いやりのある行動ができた児童に対して賞賛できるように補助簿等に記録する。	・幼稚園，保育所の幼児は，事前に６つのグループに分けておく。 ・各グループに，教師を割り振り，どの幼児もスムーズに活動ができるように支援する。 ・教育的支援を必要とする幼児については，事前に知らせるようにして，小学校の職員に様子を見てもらう。
11：15	4　インタビュータイムを行う。 ・おわりの会	・楽しかったことについて理由付けの言葉を使って発表できるようにする。	・自分の名前と「何が楽しかったのか」が伝えられるようにする。
		交流活動について児童，幼児が満足感が得られるような温かい雰囲気で行うようにする。	
	5　事後の活動	・教室で，ワークシートに，遊んだことや仲よくなった幼児の名前を書く。	・交流活動の後，小学校の遊具やグランドで自由に遊び，小学校に親しむ。

○　評価

・夏がきたことに気付き，友達や幼児と夏を楽しく過ごしている。　（関心・意欲・態度）

・交流活動の中で，友達や幼児の立場や気持ちを考えて行動し，自分の成長に気付いている。

（生活科における気付き）

4　成果と課題

・幼児と一緒に遊ぶ内容やルールについて，幼児のことを考えて計画を立てることができた。

・小学生と幼児との交流は，回数を重ねるごとにスムーズになり，次年度の交流（１・２年生の生活科の交流）に繋がるものとなった。

・教師間の意見交換や合同の研修の機会を設けたことで，小学校の教師は，幼児期においてどのような体験をしてきたのかを考えて，小学校での様々な授業作りに生かすことができた。また，子供たちの様子を実際に見取りながら，引き継ぎ等も行うことができた。

・小学校の教育課程から外れないように交流を計画することは，なかなか難しい。それぞれの環境や行事などをその都度見直しながら，より効果的な交流活動を目指したい。

・保護者や地域に対しても，交流活動について発信し，理解を深めていきたい。

特別活動「学校生活を安全に，安心しておくろう ～三笠スタイル～」	小　学　校

1　児童の実態	１年生は，初めての小学校生活に期待と不安の両方の気持ちで入学してきた。すぐに小学校生活に慣れ，スムーズに学校生活を送る児童もいれば，今までと異なる生活環境に戸惑い，学校生活のリズムに慣れない児童も見られる。
2　ね　ら　い	○　よい習慣を身に付けることができるようにする。 ○　安心して安全に生活するために，身の回りの整頓や生活のルールを理解し，自信をもって行動することができるようにする。

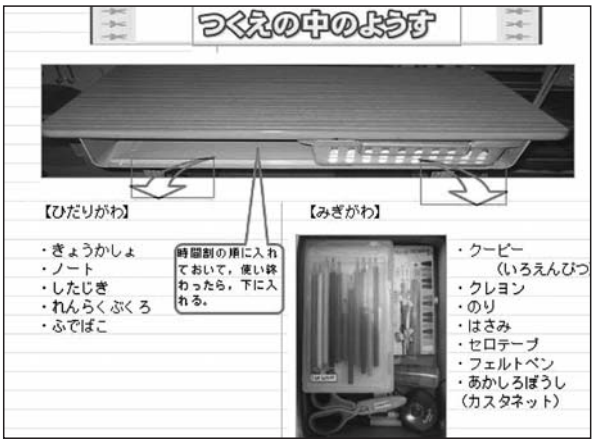
3　実 践 事 例

⑴　学校生活や学習の指南書「三笠スタイル」の作成

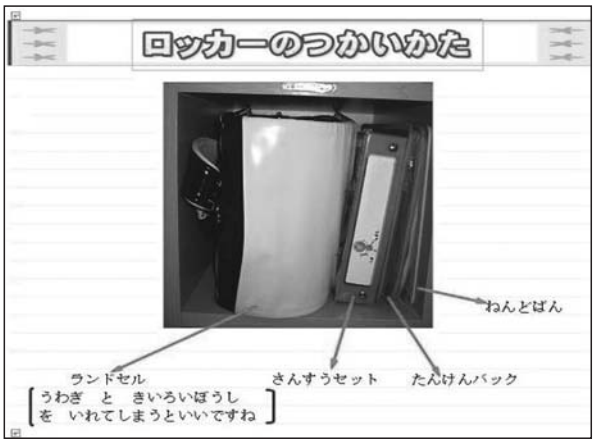
「三笠スタイル」とは，学習環境や生活環境などを学校全体で共通化して，児童が見通しをもって学習や生活ができる環境をつくることを目的として作成された学校生活や学習の指南書である。職員が児童への指導に関する情報を共有し，蓄積し，日々指導する際に生かしていくため，資料を職員一人一人がファイルに納めている。また，職員だけではなく，児童にとっても，写真や動画を見たり，解説を読んだりすれば，すぐに学校生活のことが理解できるようになっている。新しい情報や改善された内容については，付け足したり入れ替えたりして活用していく。

⑵　事例１「くつばこ，ロッカー，つくえのつかいかたをおぼえよう」

入学して，トイレの使い方とともに初めに学習する内容である。習慣化するまでに継続して指導していく必要がある。教室や靴箱，ロッカーなどに「三笠スタイル」に掲載されている整理整頓の写真（資料１，資料２）を掲示しておいたのでどの児童もすぐに理解することができ，整理整頓をする習慣が身に付いた。また，慣れてきて，反対に整頓が疎かになりがちなときにも，掲示されている写真を見ることで正しい習慣で生活ができるようになった。



机の中の整理整頓



ロッカーの中の整理整頓

(3)　事例２「そうじのしかたを　がくしゅうしよう」

時間	学 習 活 動 ・ 内 容	指導上の留意点
9：20	○　学習課題を確認する。 「みかさすたいる」で，そうじのしかたをがくしゅうしよう。	・「三笠スタイルブック」を見せて，掃除の仕方を学習することを知らせる。
9：25	○　掃除の仕方を理解する。 ・動画を見て，掃除の手順を知る。 動画を見る様子	・職員や児童が実演している動画を見せることで，掃除の手順を確認しやすくする。 ・１年生全員で動画を視聴し，手順を確認することで，児童，職員間で共通理解が図れるようにする。
9：45	・６年生と一緒に教室の掃除をして，手順を確認する。 ６年生と一緒に掃除を行う１年生	・「三笠スタイル」に慣れている６年生と一緒に活動することで，掃除の手順を理解しやすくする。 ・手順だけではなく，安全面で特に気を付ける場面について，６年生から１年生へ伝えられるようにする。 ・掃除の手順について，復唱したり，質問をしたりすることで，確認しやすくする。
10：05	○　学習課題を振り返る。 ・安全に掃除ができるように，写真を見ながら，掃除の手順を確認する。	

○　評価

・「三笠スタイル」での掃除の仕方を理解している。

・安全に気を付けて，清掃活動を行っている。

4　成果

・「三笠スタイル」には，見やすい写真や簡単な言葉で書かれた解説が掲載されているので，それを掲示することで，どの児童にも学習や生活の仕方がよく理解でき，よい習慣を身に付けることができた。

・全学年の児童が共通理解している学習や生活のスタイルなので，様々な活動で，異学年交流がスムーズにできた。

5　課題

・「三笠スタイル」に沿った取組が形骸化しないように，児童と職員を対象に実態調査を行い，意識の定着を図っている。全職員で指導をしていかなければその成果がなかなか表れないので，全職員が共通の意識をもって指導に当たっていくことが必要である。

・児童の実態にあわせて柔軟に「三笠スタイル」を変えていくことが大切である。職員は研修を行い，「三笠スタイル」の見直しを行うことが必要である。